
不時着

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不時着

【Nコード】

N5577N

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

それが雨だと知ったのはつい先日のだ。
ふわふわとした水玉がゆっくりと落ちていく。
まるでスローモーションのように。

それが雨だと知ったのはつい先日のだ。

ふわふわとした水玉がゆつくりと落ちていく。

まるでスローモーションのように。

「不思議ですか？」

声をかけてきたのはバルチェロさん。

調査員として艦に乗り込んでいた学者であるバルチェロさんならきつと私よりもこの状況にわくわくしているに違いない。

「はい。不思議です。どうしてこんなことが起こるのでしょうか？」

その言葉を待っていたかのようにバルチェロさんは微笑む。

「これは一つ仮定の話でありますが・・・」

ちろりとバルチェロさんは唇を湿らした。

「我々は本星に戻るためワープをしていた。そのワープ航行中に事故が発生し、艦は損傷。仕方がなくこの星に不時着した」

あの時の事故の衝撃はひどく、今でも多くの乗組員が医務室で治療を受けている。

「もしかしたら我々はその時過去に飛ばされたのではないのでしょうか？」

「そ、それはどういう・・・」

「この星の植物、動物の生態系。それらを見ると本星の古代のものと非常に類似します。もし計器が生きていて、この星の座標が分かるのならすぐに分かる事なのですが」

「タイムスリップした影響で今の様な不思議な光景が目の前に広がっている」と

「そう言う事です。さすがミリアルさん、飲みこみが早い。小説などで描かれるタイムスリップですが、実際に体験したという者は当然ありません。またいたとしてもそれを実証出来てはいません。もし本当にタイムスリップしたらどのような事になるのか、それは実

際に体験しなければ分からないことも当然ある訳です。この状況・

・私は揺り戻しと考えています」

「揺り戻し？」

「本来の時間の流れからいつて我々は本当はここに存在してはいけない。故にそこから分離するような働きが起きているのではないでしょう。丁度油と水が今分離しているような、そんな状況なのでしよう」

艦のモニターから見る様々な映像は確かに時間の流れからはずれていると言え、そのように見えた。

漂流者、そんな言葉が頭をよぎった。

「何いい加減な事言ってるのよ」

私の感傷的な思考を一蹴するような元気な声が響いた。

シュナイダーさんだ。

軍人たるシュナイダーさんがここに来たと言う事は、恐らく外の調査に行くためバルチェロさんを迎えに来たのだらう。

「いつから科学者はそんなにロマンチストになったのかしら？事故の一つや二つでそんなにほいほいタイムスリップしていたら、世話ないわ。第一、まず普通に考えれば本星の古代によく似た星に不時着したって思うのが普通でしょう？そう言うのを現実逃避って言うのよ」

「ふむ。なるほど。そう取られてもおかしくありませんね。ですが、科学者がロマンチストでないという見解は賛同しかねますね」

「何言ってるのよ。女一人、ろくに口説けないような男が」

「ああ、あの時の事ですか。別に私は女の人を口説けない訳ではないのですよ、シュナイダーさん」

あの時とはどの時であろうか、私の知らない二人だけの事情があるようだ。

「じゃあ、あれはどういう意味よ？」

「私は女の人を口説けないのではなくて、貴方を口説けないんですよ。どうにも貴方のような素敵な方を目の前にすると言葉を飲んで

しまつて、口に出来ない」

「だから、何言つてんのよ！」

ノロケです。

微笑み返しをするバルチェロさんに代わり答えたくなつたが、ひとまず耐えた。

完璧に私の存在を無視して、二人だけの世界を作っていた。

「こんなところにいたのか？」

「艦長?!」

突然現れた艦長に慌てふためくシュナイダーさん。

そして、その様子を見てバルチェロさんはにやにやしていた。

バルチェロさんは少し意地悪な気がした。

「時には今の状況を推論するのも良いだろう。人生謳歌するのも大事だろう。だが、今君達には乗組員達全員の命運を背負っている事も忘れないで欲しいものだ。ふむ・・・いささか言い回しがくどいか。要は補給は早い方が助かる、それだけだ」

艦長の言葉にシュナイダーさんは背筋を伸ばし、敬礼する。

「了解しました。シュナイダー、バルチェロ、両名で艦の外の調査および食料、燃料の調達をしてまいります」

それから「いくぞ」とバルチェロさんはシュナイダーさんに無理やり引つ張られて、連れていかれた。

所々にバルチェロさんは体をぶつけていたが、シュナイダーさんは気にした様子もなく引きずっている。

「あの二人は変わらん」

「ですが、それはすごい事なのだと思います。私なんかはどうにも浮ついて、落ち着きがないと言うか」

「この状況なのだ。仕方あるまいよ」

そして、艦長もまたいつも通り落ち着きを払っている。

「それに伝説の巨人をこの目で見る事が出来るなんて思いもしませんでしたし」

「伝説の巨人? ニンゲンの事か？」

「はい」

艦内のモニターに映し出されている映像を見返し、私は思わず感慨にふける。

図鑑でしか見た事もない生き物がそこに存在するのだ。

シュナイダーさんによれば、それは類似する何かしらの生き物であつて、正確にはニンゲンではないと言われるのだろうか。

「ホモ・サピエンス。智の名を二重に冠する傲慢な巨人。果たして彼らを傲慢と断じる我等は傲慢たりえないか、いささか疑問ではあるな」

「艦長？」

「いや、今はそんな些細な事は懸念するべきではないな。今はこの星で一刻も早く艦の修理を済まし、この星から脱出することを第一に考えねばならない」

「艦長、お疲れなのですか？」

ポツリポツリと独り言をいう艦長は渋い顔をしていた。

「ああ・・・いや、大丈夫だ。特に疲れていると言う訳ではないよ。しかし、とは言うものの艦の修理が思うようにはかどっていない事も確かだ。ミリアル、君も私と共に艦の修理に付き合ってくれるかな？」

「了解しました。艦長」

そして、私達は壊れた艦の修理を再開した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5577n/>

不時着

2010年10月9日06時50分発行